

中医国际教育教科書シリーズ

総編集・劉平
副総編集・張碧英

上海中医藥大学国際教育学院総企画

方剂学

編著・鉏桂祥 文小平

上海科学技術出版社

中医国際教育教科書シリーズ

総編集 劉平

副総編集 張碧英

方 劑 学

上海中医薬大学国際教育学院総企画

編著

鉏桂祥 文小平

上海科学技術出版社

图书在版编目(CIP)数据

方剂学:日文/上海中医药大学国际教育学院编. —上海:
上海科学技术出版社, 2010. 11

中医国际教育系列教材

ISBN 978—7—5478—0004—1

I. ①方... II. ①上... III. ①方剂学—教材—日文
IV. ①R289

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 165201 号

上海世纪出版股份有限公司 出版、发行
上海科学技术出版社

(上海钦州南路 71 号 邮政编码 200235)

苏州望电印刷有限公司印刷 新华书店上海发行所经销

开本 787×1092 1/16

印张 17.5 字数 350 千

2010 年 11 月第 1 版 2010 年 11 月第 1 次印刷

ISBN 978—7—5478—0004—1/R·165

定价:100.00 元

本书如有欠页、错装或坏损等严重质量问题,
请向工厂联系调换

目 次

総 論

第一章 方剤学の簡略史

2

第二章 方剤と治療法

5

一、方剤と治療法の関係	5	(四) 和法	7
二、常用の治療法	5	(五) 温法	7
(一) 汗法	6	(六) 清法	7
(二) 吐法	6	(七) 消法	8
(三) 下法	6	(八) 補法	8

第三章 方剤の分類

9

第四章 方剤の組成と変化

11

一、組方原則	11	(四) 使薬	12
(一) 君薬	11	二、組方の変化	13
(二) 臣薬	12	(一) 薬味の増減	13
(三) 佐薬	12	(二) 用量の増減	14

(三) 剤型の変化 15

第五章 方剤の用法

16

一、剤型	16	三、服薬方法.....	16
二、湯剤の作り方	16		

各 論

第六章 解 表 剤

18

一、辛温解表剤	18	(三) 麻黄杏仁甘草石膏湯	25
(一) 麻黄湯	18	(四) 升麻葛根湯	26
(二) 桂枝湯	19	(五) 柴葛解肌湯	27
(三) 九味羌活湯	21	(六) 葱豉桔梗湯	28
(四) 香蘇散	22	三、扶正解表剤	29
(五) 小青竜湯	22	(一) 敗毒散	29
二、辛凉解表剤	23	(二) 再造散	30
(一) 桑菊飲	24	(三) 加減葳蕤湯	31
(二) 銀翹散	24	四、解表剤のまとめ	32

第七章 瀉 下 剤

34

一、寒下剤	34	(一) 大黄附子湯	36
(一) 大承気湯	34	(二) 温脾湯	37
(二) 大陷胸湯	35	(三) 三物備急丸	38
二、温下剤	36	三、潤下剤	39

(一) 麻子仁丸	39	(三) 防己椒目葶藶大黄丸	43
(二) 五仁丸	40	五、攻補兼施剂	43
(三) 濟川煎	40	(一) 黄竜湯	44
四、逐水剂	41	(二) 増液承気湯	44
(一) 十棗湯	41	六、まとめ	45
(二) 疎鑿飲子	42		

第八章 和解剂

47

一、和解少陽剂	47	三、調和腸胃剂	52
(一) 小柴胡湯	47	半夏瀉心湯	52
(二) 蒿芩清胆湯	48	四、截癰剂	53
二、調和肝脾剂	49	(一) 截癰七宝飲	53
(一) 四逆散	49	(二) 達原飲	54
(二) 逍遙散	50	五、まとめ	55
(三) 痛瀉要方	51		

第九章 清热剂

56

一、清氣分熱剂	56	四、氣血兩清剂	63
(一) 白虎湯	56	清瘟敗毒飲	63
(二) 竹葉石膏湯	57	五、清臟腑熱剂	64
二、清營涼血剂	58	(一) 導赤散	64
(一) 清營湯	58	(二) 竜胆瀉肝湯	65
(二) 犀角地黄湯	59	(三) 左金丸	66
三、清熱解毒剂	60	(四) 瀉白散	67
(一) 黄連解毒湯	60	(五) 清胃散	68
(二) 涼膈散	61	(六) 瀉黄散	68
(三) 普濟消毒飲	62	(七) 玉女煎	69

(八) 芍薬湯	69	(一) 青蒿鱉甲湯	72
(九) 白頭翁湯	70	(二) 当帰六黄湯	73
六、清虚熱剤	71	七、清熱剤のまとめ	73

第十章 祛 暑 剤

75

一、祛暑解表剤	75	(一) 六一散	77
香薷散	75	(二) 桂苓甘露飲	78
二、祛暑清熱剤	76	四、清暑益気剤	79
清絡飲	76	清暑益気湯	79
三、祛暑利湿剤	77	五、祛暑剤のまとめ	80

第十一章 温 裏 剤

81

一、温中祛寒剤	81	(一) 四逆湯	85
(一) 理中丸	81	(二) 回陽救急湯	86
(二) 呉茱萸湯	82	三、温経散寒剤	87
(三) 小建中湯	83	当帰四逆湯	87
(四) 大建中湯	84	四、まとめ	88
二、回陽救逆剤	85		

第十二章 表裏両解剤

89

一、解表清裏剤	89	三、解表攻裏剤	92
(一) 葛根黄芩黄连湯	89	(一) 大柴胡湯	92
(二) 石膏湯	90	(二) 防風通聖散	93
二、解表温裏剤	91	四、まとめ	94
五積散	91		

第十三章 補益劑

95

一、補氣劑	96	(一) 六味地黄丸	107
(一) 四君子湯	96	(二) 左歸丸	109
(二) 參苓白朮散	97	(三) 大補陰丸	110
(三) 補中益氣湯	98	(四) 二至丸	110
(四) 玉屏風散	99	(五) 一貫煎	111
(五) 生脈散	100	(六) 石斛夜光丸	112
(六) 人參蛤蚧散	100	(七) 補肺阿膠湯	112
二、補血劑	101	(八) 益胃湯	113
(一) 四物湯	101	五、補陽劑	114
(二) 當歸補血湯	102	(一) 腎氣丸	114
三、氣血兩補劑	103	(二) 右歸丸	115
(一) 八珍湯	103	六、陰陽兩補劑	116
(二) 歸脾湯	104	(一) 龜鹿二仙膠	117
(三) 炙甘草湯	105	(二) 七寶美髯丹	117
(四) 泰山磐石散	106	(三) 地黃飲子	118
四、補陰劑	107	七、まとめ	119

第十四章 固澀劑

121

一、固表止汗劑	121	(三) 桃花湯	124
牡蠣散	121	(四) 駐車丸	125
二、斂肺止咳劑	122	四、澀精止遺劑	126
九仙散	122	(一) 金鎖固精丸	126
三、澀腸固脫劑	123	(二) 桑螵蛸散	127
(一) 真人養臟湯	123	(三) 縮泉丸	127
(二) 四神丸	124	五、固崩止帶劑	128

(一) 固経丸	128	(四) 完帯湯	130
(二) 固衝湯	129	(五) 易黄湯	131
(三) 震霊丹	129	六、まとめ	131

第十五章 安神剤

133

一、重鎮安神剤	133	(二) 天王補心丹	136
(一) 朱砂安神丸	133	(三) 甘麦大棗湯	137
(二) 珍珠母丸	134	三、交通心腎剤	138
(三) 磁朱丸	135	(一) 交泰丸	138
二、補養安神剤	135	(二) 黄連阿膠湯	138
(一) 酸棗仁湯	136	四、まとめ	139

第十六章 開竅剤

140

一、涼開剤	140	(五) 行軍散	144
(一) 安宮牛黄丸	141	二、温開剤	144
(二) 紫雪	141	(一) 蘇合香丸	145
(三) 至宝丹	142	(二) 紫金錠	146
(四) 抱龍丸	143	三、まとめ	147

第十七章 理気剤

148

一、行気剤	148	(五) 枳実消痞丸	151
(一) 越鞠丸	149	(六) 四磨湯	152
(二) 金鈴子散	149	(七) 天台烏薬散	153
(三) 半夏厚朴湯	150	(八) 橘核丸	154
(四) 括楼薤白白酒湯	151	(九) 暖肝煎	154

(十) 厚朴温中湯	155	(二) 定喘湯	158
(十一) 良附丸	156	(三) 旋覆代赭湯	159
(十二) 加味烏藥湯	156	(四) 橘皮竹茹湯	159
二、降氣劑	157	(五) 丁香柿蒂湯	160
(一) 蘇子降氣湯	157	三、まとめ	161

第十八章 理血劑

163

一、活血祛瘀劑	163	(十) 大黃廬虫丸	170
(一) 桃核承氣湯	163	二、止血劑	171
(二) 血府逐瘀湯	164	(一) 十灰散	171
(三) 補陽還五湯	165	(二) 四生丸	172
(四) 復元活血湯	166	(三) 咳血方	173
(五) 溫經湯	167	(四) 小蓴飲子	173
(六) 失笑散	168	(五) 槐花散	174
(七) 丹參飲	169	(六) 黃土湯	175
(八) 活絡効靈丹	169	(七) 膠艾湯	175
(九) 桂枝茯苓丸	170	三、まとめ	176

第十九章 治風劑

178

一、疎散外風劑	178	二、平熄内風劑	185
(一) 川芎茶調散	179	(一) 羚角鈎藤湯	185
(二) 蒼耳子散	180	(二) 鎮肝熄風湯	186
(三) 大秦芎湯	180	(三) 天麻鈎藤飲	187
(四) 消風散	181	(四) 大定風珠	188
(五) 牽正散	182	(五) 阿膠鷄子黃湯	189
(六) 玉真散	183	三、まとめ	189
(七) 小活絡丹	184		

第二十章 治 燥 剂

191

一、轻宣外燥剂	191	(二) 麦門冬湯	195
(一) 杏蘇散	191	(三) 百合固金湯	195
(二) 桑杏湯	192	(四) 玉液湯	196
(三) 清燥救肺湯	193	(五) 瓊玉膏	196
二、滋潤内燥剂	194	(六) 增液湯	197
(一) 養陰清肺湯	194	三、まとめ	198

第二十一章 祛 湿 剂

199

一、化湿和胃剂	199	(二) 猪苓湯	209
(一) 平胃散	200	(三) 防己黃耆湯	210
(二) 藿香正氣散	201	(四) 五皮散	211
二、清熱祛湿剂	202	四、温化水湿剂	211
(一) 茵陳蒿湯	202	(一) 苓桂朮甘湯	211
(二) 三仁湯	203	(二) 真武湯	212
(三) 甘露消毒丹	204	(三) 実脾散	213
(四) 連朴飲	205	(四) 葶藶分清飲	214
(五) 八正散	205	(五) 鷄鳴散	215
(六) 二妙散	206	五、祛風勝湿剂	215
(七) 当歸拈痛湯	207	(一) 羌活勝湿湯	216
三、利水滲湿剂	208	(二) 独活寄生湯	216
(一) 五苓散	208	六、まとめ	217

第二十二章 祛痰剂

219

一、燥湿化痰剂	219	四、温化寒痰剂	225
(一) 二陈汤	219	(一) 苓甘五味姜辛汤	225
(二) 温胆汤	221	(二) 三子养亲汤	226
二、清热化痰剂	221	五、治风化痰剂	226
(一) 清气化痰丸	222	(一) 半夏白朮天麻汤	227
(二) 小陷胸汤	222	(二) 定痛丸	227
(三) 滚痰丸	223	(三) 神仙解语丹	228
三、润燥化痰剂	224	(四) 止嗽散	228
贝母括楼散	224	六、まとめ	229

第二十三章 消导化积剂

231

一、消食导滞剂	231	二、消癥化积剂	235
(一) 保和丸	231	(一) 鼈甲煎丸	235
(二) 枳实导滞丸	232	(二) 海藻玉壶汤	236
(三) 木香槟榔丸	233	(三) 内消瘰癧丸	237
(四) 枳朮丸	234	三、まとめ	238
(五) 健脾丸	234		

第二十四章 驱虫剂

239

(一) 乌梅丸	239	(四) 化虫丸	242
(二) 肥儿丸	240	まとめ	242
(三) 布袋丸	241		

第二十五章 涌 吐 剤

243

(一) 瓜蒂散	243	まとめ	245
(二) 救急稀涎散	244		

第二十六章 治 瘍 剤

246

(一) 仙方活命飲	246	(六) 薏苡附子敗醬散	250
(二) 五味消毒飲	247	(七) 陽和湯	251
(三) 四妙勇安湯	248	(八) 内補黄耆湯	251
(四) 葦茎湯	249	まとめ	252
(五) 大黃牡丹湯	249		

索 引

総論

第一章 方剤学の簡略史

方とは方法、薬物などを指し、剤とは調剤、剤型、用量などを指す。方剤とは、中医弁証学と治療方法に基づき、適切な薬とその用量を選定してつくられた処方であり、「医方」、「薬方」ともいう。中医方剤学は、中薬の配伍およびその原理、剤型、臨床応用の法則を研究、究明する学科である。

方剤の歴史は非常に古い。原始社会の人類は、すでに薬を利用し、病を治療したが、最初は単味(単品)薬を使用し、長年の治療経験を経て幾つかの薬を配伍した複方薬を投与すればよりよい治療効果を得ることを認識し、徐々に方剤の雛形を形成するようになった。

1973年に湖南省長沙市で発掘された馬王堆三号の古墳にて『五十二病方』の医書を発見した。該書の字体から見れば紀元前三世紀末ごろの著作と推定する。本書には、具体的な経穴、五行学説、臓腑、病名などに関連する言葉がみられない、陰陽学説もほとんど触れないが、280あまりの医方が収録されており、その方剤の剤型は湯剤、丸剤、散剤、膏剤などに分けられ、またその方剤の加減、煎じる方法、服薬時間、注意点なども記載される。本書は、『黄帝内経』、『神農本草経』より古い、現存最古の医方専門書である。『五十二病方』の理論は簡単でまだ体系化されていないが、当時としては大変なことである。

中国で現存する最も古い中医学の經典医書である『黄帝内経』には、13種方剤しか収録されていないが、弁証立法、処方配伍、投薬注意点などの論述があり、方剤学理論体系の形成に基礎を打ち立てた。

東漢の張仲景が著した『傷寒雑病論』は、理、法、方、薬の集大成である。中には314種の医方を収録し、その理論は整然、配伍は厳密、効果は顕著であり、方剤学の発展に大きな影響を与えた。該書は、後人に「方書の元祖」と評された。

南北朝の徐之才は、薬物を効果により宣、通、補、泄、軽、重、滑、澀、燥、湿の十種類に分類し、また薬対(効果を高めるために二種類薬を組み合わせる使用すること)の形で『薬対』という専門書を著した。

晋時代以降、医方に関する専門書が大量に現れた。

晋代の葛洪は救急医療用のため、民間と自分の臨床経験から有効かつ簡易に行える医方と灸

方などを集めて『肘後救卒方』（『肘后方』ともいう）を編集した。該書で収録した薬は値段が安く効果がよいので民間に喜ばれた。

唐代の孫思邈は、「人命至重、有貴千金、一方濟之」という意より『備急千金要方』と『千金翼方』（あわせて『千金方』という）を著した。該書は8200あまり医方を収録し、唐代以前の医薬書の集大成である。

紀元752年、王燾は漢代以降の医方6000あまりを収録し『外台秘要』を編集した。該書では各医方の引用する書物を注釈したため、その医方の出典も分かるようになった。本書の文中には、それまでに紛失した医方専門書が幾つか保存され、たとえば、陳延之の『小品方』である。『千金方』と『外台秘要』は、唐代以前の医方を研究する貴重な書物として後世の専門家に重視される。

紀元992年、北宋の翰林医官院（中央政府医療機関）の王懷隱、王佑など数人が、民間の医方や北宋以前の医書に基づき、共同で『太平聖恵方』（『聖恵方』と略称する）を編集した。本書には16834医方が収録されている。

『太平恵民和剂局方』（『和剂局方』、『局方』ともいう）は、1078～1085年に政府で刊行した薬局方である。初刊には、297医方を収録したが、歴代の増補により、1252年になると、788医方が増える。それらの医方は当時の名医の経験から厳選されたものであり、効果がよく、ひいて後世の医方配伍の規範となり、たとえば、逍遙散、二陳湯、参苓白朮散、藿香正気散などの医方は、今も使用されている。また、医方ごとに主治（主な臨床治療）、配伍（配合）、炮制、剤型などに関して注釈する。国家として編集された薬局方としては、中国史上においてはこれが初めてであり、日本の薬局方という名前もこの書に由来したものである。

北宋の末、皇帝趙佶が太医院医官を命じ、医療機関、民間、歴代医書などの医方を整理編集し、1117年に『聖濟総録』を完成した。該書に収録した医方が『太平聖恵方』を超えて20000近くある。『太平聖恵方』と『聖濟総録』に収録された医方は多いが、比較的乱雑で、調べるには不便である。

金時代（1115年～1234年）の成無己が著した『傷寒明理論・薬方論』では、初めて「君臣佐使」という理論で『傷寒方』の20医方の配伍を論述した。方剤の配伍を論じるのは、専門書としては本書が初めて（第一部専門書物）であり、後世において「医方の注解は、成無己から始まる」といわれる。その後方剤学は臨床学科から分化され、新たな段階を迎える。

金・元時代には、「金元四大家」と呼ばれた劉完素、張從正、李東垣、朱丹溪らが現われた。

「寒涼派」と称された劉完素は寒涼薬を常用し、『素問玄機原病式』、『黄帝素問宣明方論』などの医書を著した。その代表医方に「防風通聖散」などがある。「攻下派」と呼ばれた張從正は「汗・吐・下」という三治療法をよく使っており、著書は『儒門事親』である。「補土派」と称された李杲は、脾胃機能を重要視して「補脾益氣昇陽」の方法をよく使用し、『脾胃論』、『内外傷弁惑

論』などの医書を編纂した。李氏がつくった医方「補中益気湯」は今日もよく使われている。「滋陰派」と称された朱震亨は「陽常有余、陰常不足」という説を提起し、「滋陰降火法」を常を使用した。後世に知られている医方は、「大補陰丸」、「越鞠丸」、「保和丸」、「二妙丸」などがある。

明朝と清朝には、多数の専門医が輩出した。李時珍が著した『本草綱目』は11 000あまり医方が収録された。張介賓が「陽非有余、而陰則常不足」という説を提起して温補治療を重要視し、「左帰丸」、「右帰丸」、「大補元煎」などの医方をつくった。汪昂は七言歌曲の形で方名、薬物、効能などをまとめ、『湯頭歌訣』を編集した。言葉が簡潔で、発音しやすく覚えやすい。該書は発刊以来、初心者入門の医方書として広く流伝した。呉瑭は遠くは張仲景、近くは葉桂などの理論を受け継ぎながら、「大定風珠」、「銀翹散」、「桑菊飲」などの医方をつくった。程国彭は『医学心悟』で「汗、吐、下、和、温、清、消、補」という治療八法を提起した。王清任は『医林改錯』を編纂し、活血化瘀薬を常用した。代表医方は「血府逐瘀湯」、「補陽還五湯」などがある。

また、晋朝から清朝までの間には、多数の専門科の医方書が現れた。外科の『劉涓子鬼遺方』と『外科正宗』、傷科の『理傷統断方』、薬膳の『食医心鑑』、小児科の『小兒藥証直訣』と『幼幼新書』、婦人科の『婦人大全良方』と『傳青主女科』、五官科の『口齒類要』と『審視瑤函』などの専門書が挙げられる。

その他、陳延之の『小品方』、陳言の『三因極一病証方論』、嚴用和の『濟生方』、吳崑の『医方考』、朱橚の『普濟方』、羅美的『古今名醫方論』、汪昂の『医方集解』などの医方専門書も、後世に知られている。

近代に入ると、西洋医学と現代科学技術の発達に伴い、方剤学が飛躍的に進歩した。経典的な医方の現代研究、新たな医方の開発、新しい剤型の出現など方面の変化が最も著しい。方剤学は理論方剤学、実験方剤学、臨床方剤学に細分化されるようになる。

つまり、方剤学は、各時代の医薬家によって次第に形成、発展してきた。方剤学は理論と実践、基礎と臨床に密接に結び付く学科で、弁証論治においてなくてはならないものである。